碧翼の輪廻

幽玄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧翼の輪廻

【Ｎコード】
Ｎ３０５５Ｉ

【作者名】
幽玄

【あらすじ】
地殻変動を起こし、低地が人間の住める場所ではなくなってしまった世界・エルペイラ。
異変に伴い現れた異形の生物を駆逐するために組織された、飛空挺を用いる軍・猟団への所属を夢見る少女はひとりの青年と出逢い、
そして――

王道っぽくお届けするｓｋｙ　ｆａｎｔａｓｙ

はじめに。

※　注意書き

この作品は、モバゲー及び自サイト上に同じタイトル・ペンネームで投稿されております。
決して著作権を侵害しているわけではありませんので、お知りおきください。

†一一

prologue

昏れかけて赤紫色に染まった空を見回しながら、女性は遥か眼下に広がる大地に視線を落とした。

今の王都暦が始まる幾百も前の時代に突然地殻変動を起こした世界。

ある場所は隆起し、ある場所は陥没し――　それにより人々は、初めて“高低差”と云うものを知ったのである。

地殻変動の影響か、まもなく低い大地は霧に閉ざされ、人々は高地への移住を余儀無くされ、それまでの陸地を移動する前時代的な移動方法は根こそぎ役立たずとなってしまった。

閉鎖された高地での生活。

統治者である王が没し、また生まれ、没し――　何度繰り返したのだろうか。

王位が移されるときに変わっていた年号も廃れ、王都クラウブルヒ設立に伴い《王都歴》が制定された。

そしてその王都歴６４年のこと。

当時稀代の学者と謂われたエドワーズ・サムセスカ博が《蒸気機関》を開発。
これを以て《エンジン》の基礎が生まれた。

それから七年の歳月を費やし、同博士により高地同士を結ぶための機関、《飛空挺》が開発、発表される。

一年と経たずに散り散りだった区々にその技術は伝達され――ひとは再(また)、繁栄の時を迎えた。

しかし、そんな人間の事情とはまったく関係なしに、世界の低地は未だに濃霧をその内側に抱え込んでいる。

人間はやはり、根本的な解決を試みることなく、逃げることしか考えられないのか。

人間の開発を、弱気で逃げ腰なものであると。

大した理由もなく心内で決め付けてしまうのは、自分が弱い証であろうか。

彼女はそうやって、“人間の開発した”飛空挺の上から下界を見下ろす度に、不安で弱々しい気持ちになるものだった。

――否、或いはこの大空(そら)が。そういった不安の元種なのかもしれない。

「……変な気分」

誰に聞かせるでもなく呟いた言葉はしかし、

「それはどんな気分だい？」

何者かに聞き留められた。

女性がはっとして甲板の方へと目を向けると、そこにいつの間にやら見知った青年が立っていた。

音も無く、気配も無く。ただひとえに、ぽつりと。タバートをささやかな風に揺らしながら。

「さすが《黄昏の姫君》、と言ったところか。
落日を眺めながら考え入るとは、なんとも風流だ」

青年は“いつもの”笑みを絶やさず、極ゆっくりと歩み寄って女性の隣に並び立った。

「それ、馬鹿にしてる？」

「多少」

悪びれることなく答える彼に、女性はただ嘆息する。

一体彼は、なにをしにきたのだろうか――

prologue#2

「大空が怖いかい？」

「……え？」

青年の口から出た、あまりに唐突で予想外な言葉に、彼女は少なからず動揺を覚えた。

しばしの逡巡の後、女性は低い声で答えた。

「そうかもしれないわね」

言った途端、なんともなしに気恥ずかしさがこみ上げてきて慌てて口元を覆うが、果たしてそれは意味を成さない。

青年はいつもの不適な笑みを浮かべたまま、ただ彼女の横顔を眺めていた。

「やっぱり。実は僕もね、子供のころは大空が恐ろしくて仕方なかった」

「は？」

何を言い出すかと思えば。
女性は目を剥いたまま、思わず青年を凝視してしまう。

「小さなころは、こんなに高いところなんて御免だと思っていたよ。落ちたら死ぬし、何よりこんな鉄塊に乗って移動するなんて、考えもしなかったことだから」

それは……　そうなのかもしれない。
子どものころは、どれだけ百余年前の学者が凄かったかなんて考えた試しがなかったし、鉄で出来た翼が風を孕んで飛ぶなど姿など想像だにもしなかったことだ。

しかし、成長して初めて飛空挺に乗り込んだ時の高揚感。あれは忘れもしない。彼女は未だに覚えている。
身体全体が浮つくような感覚とともに、名状しがたい興奮が湧き上がってきて無意味にはしゃいだものだった。
それが共通しているからこそ、女性は青年の言葉を識(し)ることが出来たのだ。

「でも、結局こうやって空挺乗りをやってるわけでしょ？」

彼女が苦笑混じりに言えば、彼は微笑みで返す。

「お察しの通り、僕は父に連れられて初めて大空に飛び立った時、一瞬にして“この場所”に魅せられた。
それから僕の大空への恐怖は、“憧れ”に変わったのさ」

「憧れ？」

それは少しおかしい気がした。

憧れは持続しない。

そもそも憧れというものは幻想であり、夢見るもの。しかしてその実態を知ってしまえば、そのハカナキ存在は水泡のように砕け散る運命にあるのだ。

「それって少し変」

「そうかい？　正直を言うと、僕の「憧れ」は普通の憧れとは違うみたいなんだ」

青年は身を翻し、手すりの縁を肘掛けのようにして寄りかかる。
前から押されたらそのまま落ちていってしまいかねない体勢だ。

prologue#3

「僕は常に大空に憧れを抱いている」

「でも、憧れは刹那的なものだわ」

「一般的なものはそうかもしれない。でも、僕のはそう――　ニュアンス、が、違う」

暗闇の中を手探りで進むかのような、慎重な言葉選び。彼が少しでも悩む場面を見たことがなかった女性は、少し意外に思いながらも邪魔をしないように黙って耳を傾けていた。

「航空は僕にとって、毎回一度きりの旅なんだよ。例え見知った空路でも、大空は一度として同じ顔を見せない。
その日その日によって変わる、“無二の大空”を旅することに憧れを抱くことはそんなに変だろうか？」

わからなくもない。
“未知のもの”に向かう楽しみもまた、憧れとなり得るのだから。
しかし、理解はせども、心は追いつかない。
彼女にとっての大空は――

「わたしにとって大空は、ある時から“苦しみ”の場所に変わったわ」

「……？」

これは、誰にも話したことがない。
事情を知る、当事者たち以外には誰にも。

でも、だからこそ。
彼には話さなければならない気がした。

青年は女性の纏う空気の変化を感じ、にわかに表情を変えながら向き直る。

「出来れば聞かせてもらいたいね、その「ある時」のこと」

その時の彼の笑顔は、切ないような、悲しいような。しかし不思議と力のあるものだった。

これなら話をしてもいい、と。

不覚にも心の扉をほんの少しだけ。

開いて顔を覗かせて――

「聞いてもつまらないわよ、きっと」

「物語がつまらないかどうかは、聞き手が決めることだよ、語り手さん？」

そう言って、やはり不適に笑う青年の顔を見ていると、乗せられたような、はめられたような――　そんな気持ちがこみ上げてくるが、今更引き返せない。

女性はふぅ、と深く嘆息すると、諦めたように口を開いた。

「わかった。話すわよ。

例えば――

こんな日常。

reverse of time

例えば、こんな日常の風景は如何だろうか。

草原。
キミは女の子で――　手頃な石に異性の友人と腰掛けながら、鰯雲が漂う夏宵の空を見上げている。

とうに帰る時間は過ぎているけども、キミたちはなんともなしに、ただ空を見上げるだけの時間を過ごしていた。

「あのさ」

隣の少年が、何かを切り出すように突然声を上げた。
少しびっくりしたキミだったけど、すぐに「なぁに？」って優しく微笑んだ。

頬をにわかに赤く染め上げた彼は、「ボクさ、ボクさ！」となにかを一生懸命伝えようとしてきている。
キミは急かすことをせず、黙ってそれを見守った。

「ボク、大きくなったら《大空騎士》に成りたいんだ！」

突然の夢の吐露。

キミはそれに、「危ないよ」だとか「死んじゃうかも」だとか、そういった茶々を入れずに「へぇ」、と頷く。

だんだん彼の夢の話はヒートアップしていって、なぜ大空騎士に成りたいのか。大空騎士がどんなに格好いいか。

全部語って聞かせてくれた。

「だからボクは、大空騎士になって悪い《翼竜》をやっつけたいんだ！」

それがどんなに危ない仕事か知っているキミは、つい心配になって口を出す。

試験を受けないと猟団には入れないだとか、猟団の中での上下関係は絶対だとか。

キミには猟団に入団したものの、厳しさに堪えきれず帰ってきた兄が居たので、その辺りの知識はあったのだ。

「ボクは大丈夫だよ！」

彼は意気揚々と宣言したが、キミは大丈夫だとは思えなかった。

なぜなら……　要するに、そう。

彼が“ヘタレ”だったから。

女の子のキミと喧嘩して負けるような少年が、厳しい規律や、増して《翼竜》相手にどこまで保つかなんて、まだ幼いキミにだってすぐに予想できる。

「どうしても、大空騎士に成りたいから……
お父さんだって、「そういう気持ちがあれば絶対になれる」って言ってたし」

彼のお父さんがどうかは知らないが、たしかにその通りだとは思った。

いくら技術があろうが、気持ちが伴ってなければどうにもならないことだってある。

だから、そうやってひたむきに夢を見られることは、キミにとって“憧れ”だった。

「わたしは、いったい何になるんだろうね？」

唐突に呟いた言葉は、少年をビビらせ
、キミ自体を惑わした。

普通に考えれば、キミは生まれた町で普通の町娘となり、成長して、それなりの男と結婚して――　と、まるで母親と同じような人生を歩むことになるのだろう。

しかし、それじゃあつまらないじゃないか。

キミは紫色に澄み渡った、無数の星を頂く宵口の“大空”を見上げて。

わたしもいつか、“あの場所”を旅する日が来るといいな、と。

隣でどうしていいかわからずにテンパる少年を置き去りにして、まだ見ぬ旅（未来）のビジョンに思いを馳せるのだった。

――結局、その日は遅くなりすぎて。

母親にお仕置きを食らったことも、今や遠き日の彼方。

そんな「ある誰かさん」の、幼い夏の日常の一ページ。

#Record 1

「例えば、こんな日常」

〜Once upon a time.・・・〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3055i/

碧翼の輪廻

2010年10月15日21時54分発行